

満洲国における唯一の商業文芸雑誌

第Ⅱ期では満洲における、唯一の商業文芸誌

『藝文』（満洲藝文聯盟・満洲文藝春秋社版）と、第

Ⅰ期『藝文』（藝文社版）後続誌である総合雑誌

『満洲公論』（満洲公論社）を復刻。

日中両国第一線の研究者が集い、その全貌を
明らかにする。

藝文

第Ⅱ期
全14巻

◆監修◆

呂元明

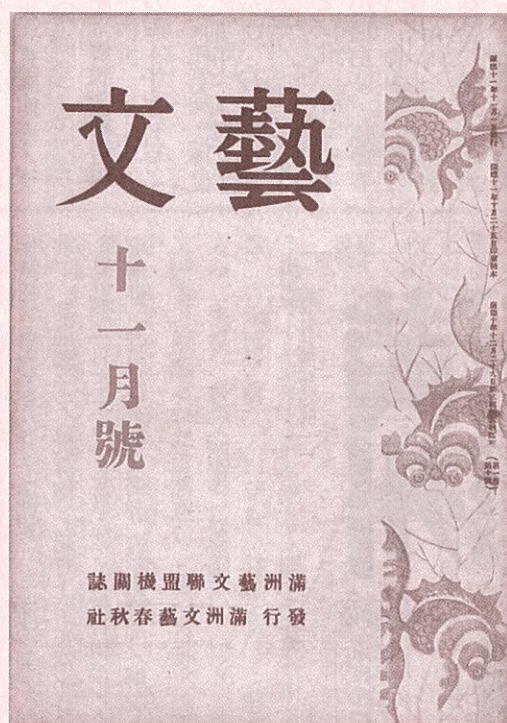
東北師範大学名誉教授

鈴木貞美

国際日本文化研究センター教授

劉建輝

国際日本文化研究センター准教授



ゆまに
書房 YUMANI
SHOBOU

一九四四年一月、満洲国で新たな文芸雑誌が誕生した。今回は満洲藝文聯盟の機関誌であったが、やがて満洲文藝春秋社に発行所が移る。同誌は、満洲国における唯一の（最初にして最後の）商業文芸雑誌であった。

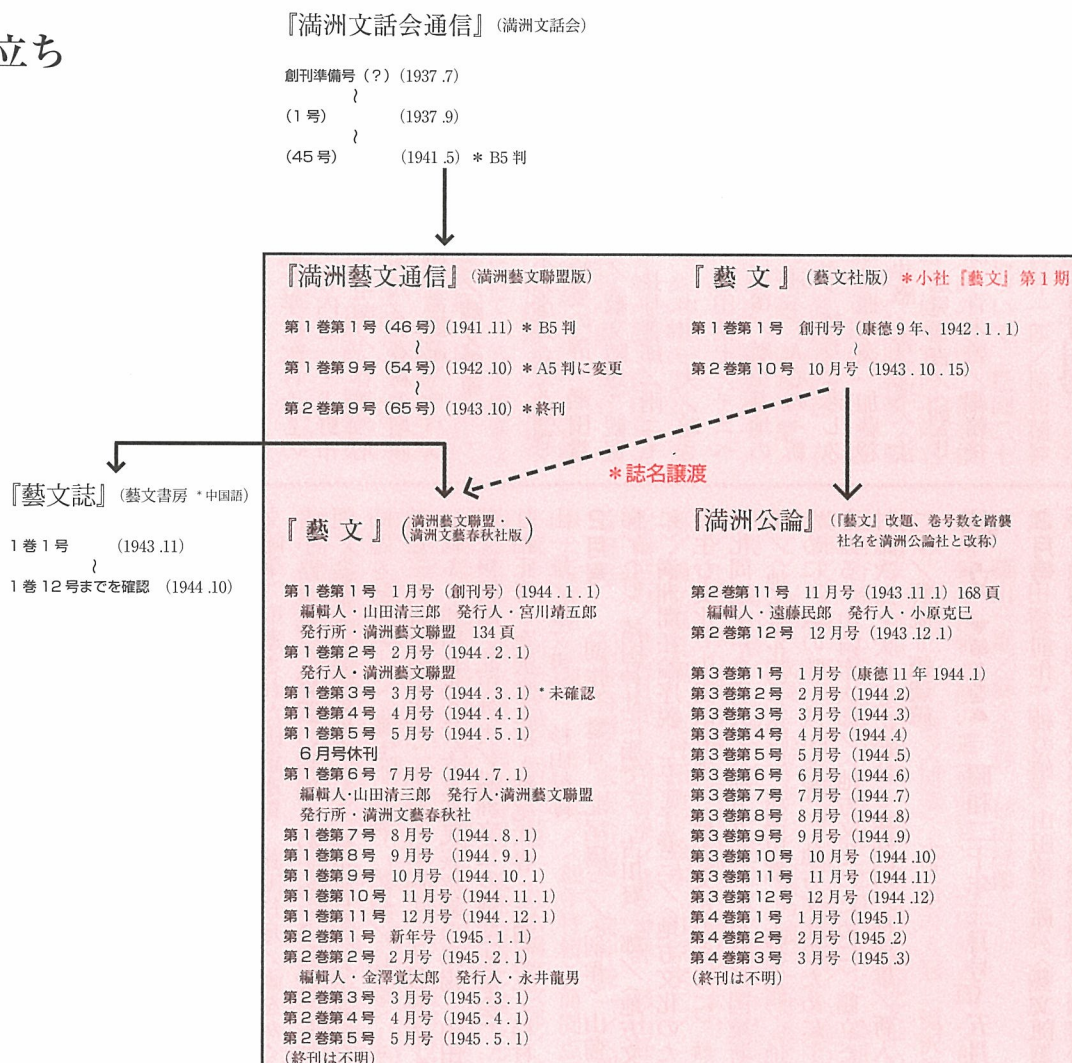
これまでの藝文社版『藝文』（小社にて既刊）は、その誌名を満洲藝文聯盟に譲り、『満洲公論』と改題（版元も満洲公論社と改称）、再出発することになる。従来、同誌には「文化綜合雑誌」と銘打たれていたが、再出発に当たってはこの肩書きが除かれ、一般綜合雑誌のスタイルをとることとなった。しかし、編輯方針に大きな変化は見られず、同誌は「文化雑誌」としての面目をそのまま持続していく。

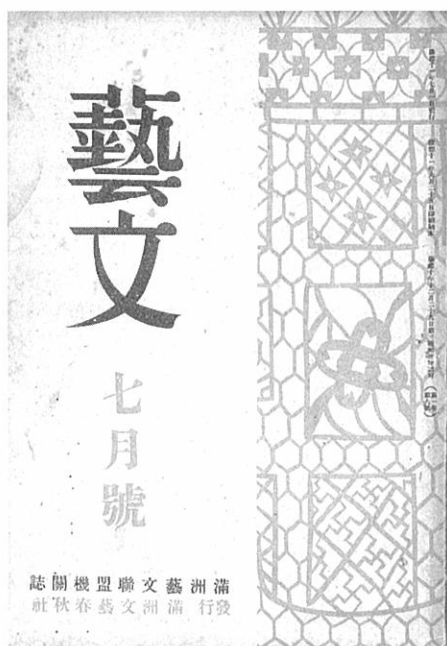
日本敗戦と満洲国消滅は、翌年のことである。『日満一体』のスローガンのもと、軍と政府による文化統制が格段に強化されるなか、日中両国の文学者・文化人たちは、どのように生き、何を、どのように表現していくことになったか。満洲国の終末の様相が両誌には露わである。単に文芸・文化の面に限らず、満洲国そのものの実態をよく窺うためにも、両誌に対する検証作業を決してゆるがせにはできない。

『藝文』、『満洲公論』両誌が、いつまで刊行されていたかについては、いまだ明らかにできない。小社、その全貌では、日中両国に現存する両誌のバックナンバーを極力探索し、今日なしうる最良の形をもって、ようやく復刻に踏み切ることにした。

おおかたのご理解とご支援を期待したい。

『藝文』の成り立ち





藝文 ▼第1巻▲ 昭和十九年一月号〜二月号

1月号 自足他給 藝文発刊に寄す 市川敏／創刊の辞／決戦時局に即応する藝文推進の彷徨 山田清三郎／開拓文学論 中川一夫／在満作家の作品取材について 清水平八郎／日満系作家の交遊 爵青／今日について(文藝時評) 青木実／美術家の現代的任務(美術時評) 桑原宏／写真藝術と写真家 加持正範／(詩) 薩爾岡 岩本修蔵／(詩) 驚 八木橋雄次郎／(詩) 北の兵隊 三好弘光／午前中一時間 竹内正一／部落に思ふ 小林実／何もない机の上で雑文を書く 町原幸二／芸能随感 聖戦記録映画と北の護り 高原富次郎／芸能随感 音楽随感 北小路功光／芸能随感 近頃の演劇 榎本捨三／芸能随感 国内演劇の自給自足 藤川研一／(短歌) 学徒出陣 高山照二／(短歌) たたかひ深し 橋本浅夫／(俳句) 鞍山にて 三木朱城／(俳句) 帽庇 佐々木有風／(小説) 寒流 疑途(大内隆雄・訳)／(戯曲) 決戦の理由 林田茂雄／全国藝文家会議記録／編輯室

2月号 戦争と藝文 長谷川宇一／決戦と文学の役目 西村真一郎／決戦と作品価値の基準について 中川一夫／映画の役割と技術について 原健一郎／思想戦と美術 藤山一雄／戦争短歌に就いての私見 土方敏／(短歌) 唯畏配給 渡辺三角洲／(俳句) 撃ちてし止まむ 金子麒麟草／(俳句) 寒夜抄 成田凡十／批評道の確立について 秋原勝二／「早春」

の花 三戸正孝／上村家の人々 尾田幸夫／編輯室／解説 戦時梅

* 6月号発行ナシ

藝文 ▼第3巻▲ 昭和十九年七月号〜八月号

7月号 《藝文随想》 拝む心と絵画 平島敏夫／《藝文随想》 鹿間毒語 神尾式春／《藝文随想》 杜甫の白酒 川上行蔵／《藝文随想》 熨斗 滝川政次郎／《藝文随想》 秋永し満洲 三溝沙美／東京の決戦色 山田清三郎／新京の生活 芝木好子／満洲国の文学 川端康成／生活の匂ひを欲す(藝文時評) 林田茂雄／山小屋通信 北村謙次郎／(短歌) 野火 鶴見英之／戦争画への感想 桜井知足・浅枝青甸・太田洋愛・柴正博・吉村恂・千種達夫・松岡二十世／満洲文学に欠けたもの 逸見猶吉・神戸悌・尾田幸夫・大森志朗・竹内正一・上野市三郎・満田隆一・長谷川濬／我が俳諧 葛祖蘭／春耕の増産地帯・現地報告 毛大八／春耕の増産地帯・現地報告 湯原縣記 桑原宏／《南海激闘記》ラバウルの闘志 木村莊十／雑巾先生 小尾十三／藝文彙報(二)／藝文彙報(二)／編輯後記

8月号 《藝文随想》 東官大佐のこと 宗光彦／《藝文随想》 菟麻伸びる 大場白水郎／《藝文随想》 晩夏の辞 瀬田常男／《藝文随想》 詰将棋と配給 志方益三／《藝文随想》 観覧的と客観的 阿部俊男／老婆心あれこれ 長与善郎／雨ニモマケズ 森莊己池／郷愁の文学(文藝時評) 中川一夫／暗さについて 古丁／南方から見た日本映画 越田清七／テニへ印象記 大間知篤三／札實炭砒記 長谷川濬／航空基地の人々 新田潤／決戦一途・藝文人の志を述ぶ 人心の一新 簡井清彦／決戦一途・藝文人の志を述ぶ 怒りと悲しみ 三井実雄／決戦一途・藝文人の志を述ぶ 血の炎 加藤将之／決戦一途・藝文人の志を述ぶ 悲願寸感 青木実／決戦一途・藝文人の志を述ぶ 必滅の大道 逸見猶吉／創作 清苑 宇野木敏／創作 山のなかの中隊 青木啓／編輯後記／解説 単援朝

藝文 ▼第4巻▲ 昭和十九年九月号〜十月号

9月号 《藝文随想》 満洲の空 三浦直彦／《藝文随想》 名

根岸寛一／夏目漱石と旅 長谷川濬／満洲映画界をめぐる諸問題 洪谷哲夫／絵と文 飛行隊を描く 桑原宏／(働らく藝文人) 長い廊下 八木橋雄次郎／(働らく藝文人) 雪の日 木田龍／(働らく藝文人) 今年のこと 大野沢緑郎／(働らく藝文人) 職場と文藝 菅忠行／(詩) 千山々脈 坂井艶司／上海の炉辺 石川信雄／聖阿片戦争 森莊己池／藝文書評 杉山緑郎／解説 鈴木貞美

藝文 ▼第6巻▲ 昭和二十年一月号〜二月号

1月号 《創作》 海と湖と人間と 長谷川濬／《創作》 蓄音器 青木啓／藝文人に望む 甘粕正彦／《藝文随筆》 豊かなもの 梅震／《藝文随筆》 放送劇について 金丸やす子／《藝文随筆》 取遣された俳諧連句 藤田月舟／画をかく喜び 武者小路実篤／《翻訳の問題をめぐって》 紙ひとへ 大森志朗／《翻訳の問題をめぐって》 翻訳管見 石田武夫／《翻訳の問題をめぐって》 激しい精神 爵青／(短歌) 正身の翼神 渡辺三角洲／(絵と文) 赤蜂を訪ねて 千種達夫／誰のために戦ふ 和田日出吉／大東亜民族意識の昂揚 山田清三郎／藝文複製論 北川鉄夫／満洲文化の構想(座談会) 《出席者》 甘粕正彦・金沢覚太郎・神尾式春・三溝又三・杉村勇造・藤山一雄／藝文書評 杉山緑郎

2月号 《創作》 登音 北尾陽三／《創作》 山葡萄 神戸悌／(詩) 靖国神社に詣でて 古川賢一郎／《地方文化のために》 満洲開拓論序説 五十子巻三／《地方文化のために》 土の生む文化 山田清三郎／《地方文化のために》 熱河工作と文化問題 戸倉勝人／《地方文化のために》 国境断想 船水清／《地方文化のために》 遠津川郷 上野凌崎／《地方文化のために》 鉄の味 浅川四郎／《地方文化のために》 太平川村を観る 山崎末次郎／《地方文化のために》 鶴立だより 北村謙次郎／大東亜に於ける満洲国 林房雄／新人創作募集 (二)／解説 劉建輝

藝文 ▼第7巻▲ 昭和二十年三月号〜五月号

3月号 《創作》 柚の娘 山田清三郎／《藝文随筆》 狗を叱って離婚せらる 滝川政次郎／《藝文随筆》 画く心境 赤瀬川安彦／《藝文随筆》 良き指導者 牛久昇治／《藝文随筆》 支那文学の泡(二) 福島杏城／水牛と白菜 長与善郎／価値の

と「寡婦」(作品月評) 筒井俊一／劇団の数と質(演劇時評)
絲山貞家／(詩) 急降下爆撃 古川賢一郎／(詩) 花々の日は
過ぎて 大野沢緑郎／(詩) 雪の朝に 井上麟二／(詩) 魁
松畑優人／冬山の印象 田郷／(隨筆) 戸外礼讃 北尾陽
三／(隨筆) モンペ随感 押野慶正／(隨筆) 哈爾濱回想 山
路一郎／北滿藝文の問題 上野凌略／支那を読む 大内隆
雄／(小説) 兄妹 長谷川溶／(小説) 途 竹内正一／(小説)
国境 高田憲二訳、エヌ・ペトリン／一路総進撃の路へ！
(全国藝文家会議記録)／編輯室／解説Ⅱ呂元明

*3月号は所載を確認できず欠号

藝文 ▼第2巻▲ 昭和十九年四月号／五月号

4月号 国民生活と藝文 紫藤貞一郎／郷土美の探求につ
て 甲斐巳八郎／国防色と絵具 古長敏明／生活の簡素化と
藝文 筒井新作／わが座右銘／クゼリン環礁の米兵に与ふ
古川賢一郎／決戦の秋は薄れり 逸見猶吉／恒山炭砒を行く
岩本修蔵／伐採紀行 八木橋雄次郎／漠河の春 船水清／雜
歌 桃北好澄／滿洲の自然と作家 上野凌略／批評の貧困
(文藝時評) 木畑卯市／春日所思 竹崎志水／新人作家の誘
導について 吉野治夫／春風 三木朱城／詩一篇 坂井艶
司／(良書推薦) 藝文の圖書二冊 山崎末治郎／安東藝文の
潮流 川原与惣右衛門／機関雜誌の藝文欄について 島田
清／日記 高屋窓秋／落款に就て 米山朴堂／滿洲良雄豆
山田よし子／隣組と藝文家 望月百合子／(小説) 願文 秋
原勝二／(小説) 魏某の浄罪 大内隆雄訳、爵青／編輯室
5月号 (戦時娯楽と藝文の問題) 娯楽と藝術について 宮
井一郎／(戦時娯楽と藝文の問題) 出版と娯楽の問題につ
て 竹本孫一／(戦時娯楽と藝文の問題) 演劇とその娯楽性
瀬部良夫／(戦時娯楽と藝文の問題) 演劇の思想性と娯楽へ
の役割 絲山貞家／(戦時娯楽と藝文の問題) 農村の娯楽と
藝文 菅忠行／(戦時娯楽と藝文の問題) 巡廻映写の役割に
ついて 大塚有章／(戦時娯楽と藝文の問題) 職場の行くべ
き道 宮川敏夫／大東亜宣言と滿洲文学 山田清三郎／滿洲
の伝統と滿系文学 大内隆雄訳、呉郎／滿洲文学について
遠田民夫／作家の視野について 青木実／滿洲文学の表情
島田清／宿命の土地 古川賢一郎／バイコフの書斎 大野沢
緑郎／水道 神戸悌／写真藝術の自律性 佐藤甫／台詞につ
いて 柿沢元徳／最近の国内出版 筒井俊一／哈爾濱藝文だ
より 岩本修蔵／(歌句) 春水 三溝沙美／(歌句) 長男海鷲
に召さる 末石休山／(歌句) 職場日常詠 太田広実／(歌句)
弟征く 大谷多香子／(歌句) 城小確／海の色 仁木良介／草

人の書翰 杉村勇造／(藝文隨想) 戦捷の要訣 三宅光治／
(藝文隨想) 「型破り」隣組葬 奥村義信／(藝文隨想) 戦場と
研究室 大平得三／元雜劇の意義 吉川幸次郎／或る夜の拍
手 横光利一／実践としての滿洲文学 宮井一郎／協和と精神
を休得して 山田清三郎／協和と文藝賞について 松岡二十
世／幅の広い生活 矢崎高儀／少国民のための文学 筒井俊
一／二葉亭と滿洲 竹内正一／(短評特輯) 協和賞の浜崎君
青木実／(短評特輯) 形装と精神 遠田民夫／(短評特輯) 職
場文学への要望 島田清／(短評特輯) 周毓英氏の一文 森
田甲子三／馬雇員のこと 清山健一／蒙古地質調査の旅 花
田信次郎／作品月評 筒井俊一／(詩) 熱禱歌 春日英聖／
(俳句) 天嶮 佐々木有風／(職場文学) 転進譜 瀬部良夫／
(職場文学) 町工場 木田隴／編輯後記

10月号 藝文動員(巻頭言)／(特輯小説) あの時のこと 青
木実／(特輯小説) 氷滑場 筒井俊一／(特輯小説) 匪団撃退
菅忠行／(特輯小説) 汽車 秋原勝二／(特輯小説) 形見 小
尾十三／(特輯小説) 破山旅館 石田達系雄訳、小松／(特輯
小説) 分村記 竹内正一／(詩) 秋苑にて 松畑優人／(月評)
作品月評 林田茂雄／(月評) 詩の動向に就て 八木橋雄次
郎／滿洲の文学を考へる 柿沢元徳／全聯第一日 森莊巳
池／北京の乞食 滝川政次郎／滿洲習俗小攷 長岡博男／竿
綸隨筆 佐藤垢石／安井曾太郎氏を囲んで(座談会)出席者
安井曾太郎・三浦直彦・杉村勇造／編輯後記／解説Ⅱ劉春英

藝文 ▼第5巻▲ 昭和十九年十一月号／十二月号

11月号 (創作) 重役の夢 山田清三郎／(創作) 野獣の夜
香川重信訳、バイコフ／(創作) 幼きたたかひ 石田達系雄
訳、疑遲／(藝文隨筆) 東洋人の席 遠藤隆次／(藝文隨筆)
『まじころ』 梅野実／(藝文隨筆) 都市と文化 小田内通
久／(藝文隨筆) 父の死 千種達夫／論語の面白さ 佐藤春
夫／開ふ書物 田中総一郎／思ふこと二、三 青木実／美の
構造と表現方法 林田茂雄／短編小説など 中川一夫／文学
者の努力 山田清三郎／滿洲文学の性格と使命 爵青／台湾
沖航空戦(短歌) 三井実雄／成吉思汗廟大祭に寄せて 大間
知篤三／(熱河宣報隊現地報告) 新しき道を行く 八木橋雄
次郎／(熱河宣報隊現地報告) 西南雜感 田中辰佐武郎訳、
古丁／編輯後記

12月号 (創作) 厄払い 高木恭造／(創作) 黒穂病 石田
武夫訳、里雁／(藝文隨筆) 淮南考 平田春夫／(藝文隨筆)
尾田幸夫君を悼む 山田清三郎／(藝文隨筆) 白系ロシア人
のことなど 柏木孤矢郎／決戦藝文の途(座談会)出席者
長谷川中佐・筒井俊一・八木橋雄次郎・長谷川溶／わが俳句

倒錯(文藝時評) 林田茂雄／「山葡萄」に就いて 齊藤慎
一／日本人の滿洲勉強 丸茂武重／(短歌) 旅愁 石川信
雄／(詩評) 詩人蹶起の日 八木橋雄次郎／(句評) 俳界小心
録 吉田橙子／中国の印象 石田武夫訳、田郷／日本音楽漫
言 藤山一雄／藝文書評 杉山緑郎

4月号 決戦必勝の道(巻頭言) 山田清三郎／(創作) 日ご
よみ 竹内正一／(藝文隨筆) 大東亜の人物 滝沢俊亮／(藝
文隨筆) 無題 丸山和雄／(藝文隨筆) 支那文学の泡(二)
福島杏城／(藝文隨筆) 上野市三郎君のこと 桑原宏／再説
滿洲文学論 宮井一郎／興亜の賦 菅忠行／(柚の娘)に寄
せて 人間の成長 小尾十三／(柚の娘)に寄せて 対象の
分裂 島田清／(柚の娘)に寄せて 作家の道程 中川一
夫／(詩) 神の渡御橋 春日英聖／鶴立だより 北村謙次
郎／鶴立縣景観 北村拓造／絵本 町原幸二／一杯めし屋
佐藤垢石／美術月評 池辺青李／藝文書評 杉山緑郎

5月号 (創作特輯) 家族(中篇) 筒井俊一／(創作特輯)
奉公隊誕生(短編) 青木実／(創作特輯) 簡閑点呼(中篇)
小尾十三／(創作特輯) 初雨(詩) 八木橋雄次郎／(創作特輯)
辺土(詩) 船水清／(創作特輯) 琉球海溝に居らん(詩) 大野
沢緑郎／(創作特輯) 沖繩の姉妹たち(詩) 白鳥富美子／(創
作特輯) 早春より春へ(俳句) 三溝沙美／(創作特輯) 旅(短
歌) 築地藤子／(批評欄) 語り上手を活かせ 山田清三郎／
(批評欄) 「日ごよみ」を読んで 長谷川溶／(批評欄) 誠実と
虚構性 菅忠行／藝文書評 杉山緑郎／解説Ⅱ西原和海

滿洲公論

三月號

定価 一圓二十錢

會談座 滿洲文化の共榮を

特設精神と蘭花 本多俊郎

山下奉文を語る 田田三

満洲公論 ▼第1巻▲ 昭和十八年十一月号〜十二月号

11月号 決戦下の地方行政を語る(座談会) 〈出席者〉石垣貞一・滝本実春・吉岡清・三原朝雄・緒形則重/蒙旗行政の進路 及川三男/県政の手記 牛島晴男/蒙政談義 河内由蔵/戦争遂行の経済的基礎 中西仁三/聖戦完勝と興運運動 米野豊実/米国の国防計画 平田春夫/大陸国防保健対策の方途 岡崎寛之/鉦工増産報道記 鬼になる 古川賢一郎/鉦工増産報道記 戦ふ鋼 菅忠行/満洲と森鷗外 山下雄児/チンギス汗(九) ヤンチエウェツキイ、丹羽新一郎/本誌・改題について/第二回大東亜文学者大会より帰りにて 文学者の決戦 古丁/第二回大東亜文学者大会より帰りにて 実践議決事項について 山田清三郎/大陸秘譚 蒙古の「鈍奇呆亭」(続) 東大作/辻説法 丸山海介/俳句 仲秋吟 末石休山/詩 春の吹雪に 松畑優人/文藝時評 個我と全体と 宮井一郎/小説 早春 竹内正一/編輯後記 12月号 戦力増強と労務体制確立の方途 小泉幸之輔/漢民族の不服従の服従について 薄田司/国防経済の本質的現実 丸木雀夫/遼の遺跡を巡る(二) 滝川政次郎/詩 十二月八日の朝 高木恭造/北京毒草園記 牧岡健次/バギオ紀行 佐藤観次郎/冬の美しさ 坂本牙城/樹木のすがた 三島超/増産遂行と興農金庫 長谷川喜輔/チンギス汗(一〇) ヤンチエウェツキイ、丹羽新一郎/地図を眺めて 中山美之/大陸秘譚 俠雄バプチャップ 東大作/辻説法 丸山海介/満洲藝文への反省 明石寺雪夫/文藝史の転換期 林田茂雄/小説 曉暗 青木実/小説 馬郡 八木橋雄次郎/編輯後記

満洲公論 ▼第2巻▲ 昭和十九年一月号〜二月号

1月号 亜細亜共同体経済建設の推進 栗野長七郎/大東亜文藝復興論 山田清三郎/国体思想の真理性 三村宗弘/在満日本人教育の疑念を懐ふ 小黒善雄/攘夷の精神と日本の世界観 中島駿吉/遼の遺跡を巡る(二) 滝川政次郎/決戦美術展望 池辺青李/菓子も戦つてゐる 長谷川唯夫/虫と闘ふ農村 大貫大八/農村旅日記 古長敏明/満人社会の正月 斎藤眞一/チンギス汗(一一) ヤンチエウェツキイ、丹羽新一郎/辻説法 丸山海介/短歌 新春頌 高山照二/俳句 早瀬の瀬戸 阿部篤人/満洲藝文運動の特徴

頭開される満洲建国の意義 /民族と教化 福富一郎/東洋学の再建 小糸夏次郎/中世の国学 岩佐正/特輯 航空決戦 航空決戦と防空 木下春二/特輯 航空決戦 太平洋攻防戦 高戸顕隆/特輯 航空決戦 敵米英航空機製作の動向 原文哉/特輯 航空決戦 雷撃機 岩本喜一/特輯 航空決戦 決戦航空と成層圏爆撃 斎藤寅郎/大東亜の復興と日本海軍 植松尊慶/満洲カナに就て 神是俊/大家庭劉家 千種達夫/造船の話 山田丁二/農業戦力と科学技術者 満田隆一/疎開・人情 大原喜多郎/輸血挺身隊のことなど 二階堂一種/鶏鳴 城小確/学生の出陣 内田百閒/詩 姑子奄河のほとり 岩本修蔵/満洲新聞界の批判検討 『再編成以前』の必要 原三吉/満洲新聞界の批判検討 使命役割の再認識 東山清/創作 応接室にて 石川達三/創作 凍原 長谷川澄 6月号 社論 道義国政の浸透/社論 言を慎み重んじよ 敵米英の戦争目的を衝く 野村重臣/明治維新と米英森克己/満洲国農業の任務と其の基本的性格 矢野統蔵/必ず勝つ 斎藤瀏/決戦時局と新吏道 御手洗辰雄/総力結集の要諦 森田甲子三/ソロモン航空撃滅戦 日野藤吉/北太平洋戦線の緊迫 千葉愛雄/戦時航空輸送の重要性 斎藤寅郎/連載 春秋戦国夜話(二) 柴田天馬/満洲国の宣伝決戦 青木太郎/敵「神経戦争部」の動向 水野正次/帰農のころ 上泉秀信/実験室の壁 高木恭造/興亜塔 享楽追放 村木伍朗/興亜塔 点頭か搖頭か 内山完造/興亜塔 愛すべき住民 北本孝尊/建設時評/決戦下の青年技術者 古長敏明/満洲の森林資源 竹内亮/極楽島 中山義秀/創作 水の上 牧野吉晴/老莊稼 菅忠行/編輯後記

満洲公論 ▼第5巻▲ 昭和十九年七月号〜九月号

7月号 社論 道義国際法典の創造/社論 協和会運動の道統を活かせ/決勝政治と国民運動 河野密/民族と生活 坪崎治男/企業の家性 村井藤十郎/国学と大東亜精神 保田興重郎/国民闘力と協和会運動(座談会) 〈出席者〉三宅光治・甘粕正彦・松木俠・坂田修一・何春魁・天野寛・山田清三郎/満洲国の実在的意義 周毓英/中共対策の根柢 川崎万博/満洲新聞新体制論 東山清、森崎実/在支敵空軍論 原文哉/敵米国の脆弱性は何か 松村四郎/警戒すべき敵アメリカ飛行艇 斎藤寅郎/貯蓄の表情 平田春夫/親の

永田伊之蔵/戦ふ現地 此頃の農畜増産動向 高橋昇一/戦ふ現地 隧道建設 石村近雄/戦ふ現地 興農会育成の姿 小林実/戦ふ現地 鄉村建設の輪郭 村上狂二/女子総進軍 希望に溢れる開拓女塾 花田歌/女子総進軍 国婦は進軍する 宋王秀英/女子総進軍 美しい笑顔 望月百合子/女子総進軍 留守宅の女性達 八木あき/悪 滝川政次郎/興亜塔 東京 決戦内閣 大原喜多郎/興亜塔 北京 護郷の英雄 根津精/興亜塔 上海 戦局と上海居留民 蔵居良造/建設時評/春秋戦国夜話(三) 柴田天馬/み戦は涼し 榊山潤/歌と俳句 母校訪問飛行 本多修郎/歌と俳句 美事の葉 野島嶋人/歌と俳句 決戦譜 赤沼茂芳/編輯後記

満洲公論 ▼第6巻▲ 昭和十九年十月号〜十一月号

10月号 大東亜の維新経済体制 仁宮武夫/政治体制の検討 富永理/海戦争の新展開 植松尊慶/新世界創造の精神 榛葉英治/皇道満洲史の構想 北川房次郎/決戦増産の要訣 久保宇/増産現地報告 咆哮する鶴岡 呉郎/増産現地報告 七道溝の印象 劉漢/北票の女子授産場 山田清三郎/蒙古の遊牧経済について ゴルロタイ/闘ふ中国工説団 陳端志/空襲と神経戦 平井仁八/戦争とグライダー 斎藤寅郎/闘ふ心 本間憲一郎/お嬢さん 晶埜ふみ/列車の中 真杉静枝/興亜塔 南京 人為のつんぼと盲目 大石淳/興亜塔 昭南 マライ現住民の決意 大島昭/興亜塔 東京 戦意充実 平田重雄/興亜塔 蒙疆住みよい蒙疆 吉江穂人/建設時評/公論常会 決戦下の新聞紙対策 森常雄/公論常会 協働隊の結成 菊原秀雄/公論常会 文化的恥辱 成田清一/公論常会 激怒の方向 増尾喜兵衛/詩 曉天に練る 三好弘光/短歌 篤農家 山中達三/俳句 明治節 三溝沙美/春秋戦国夜話(四) 柴田天馬/大和村 竹内正一/編輯後記 11月号 市民経済の追放 西谷弥兵衛/これからの世界・民族 斎藤响/明年度興農増産対策に就て 牧野克己/歴史的自己の発見 井貫軍二/四度廻る十二月八日 金崎賢/世界を変へた三年間 平井久/神鷲に応へむ 原三吉/寒地生活の二問題 住宅に就て 矢崎高儀/寒地生活の二問題 衣服に就て 藤森章/頭山満翁を語る 木村毅/香取の神・鹿島の神 大森志朗/風霜の庭園 三溝沙美/八瀬婦人の見方 藤山一雄/十年一貫(二) 武藤富男/建設時評/興亜塔 東京 女性・煙草 酒巻三造/興亜塔 上海 誠意実践 宮本八郎/興亜塔 北京 提唱・興亜大学 根津精/詩

清水平八郎／〈創作〉敵機来るに 晶柱ふみ／〈創作〉山火
劉漢／〈大内隆雄記〉／〈創作〉地力 上野凌崎／編輯後記

2月号 共栄園建設と防衛上の諸問題 平貞蔵／大東亜青少年運動の展開 大森峯雄／大東亜民族の黎明 中保興作／アジア人の勝利の為に 富永理／生活の戦闘配置 坂田修一／決戦生活の隘路打開 米田健次郎／満鮮文化の形成 金原省吾／満洲文学の起点 遠田民夫／義勇隊訓練所と開拓文化の問題 筒井俊一／戦争と大豆 三木昇一／決戦と科学 志方益三／軍政下バリ島の秘境の生態 岩城政治／チンギス汗（二） ヤンチエヴエツキイ作、丹羽新一郎訳／〈隨筆〉冬の夜話 美川きよ／辻説法 丸山海介／〈小説〉基地の情 丹羽文雄／〈小説〉苦杯 北村謙次郎／編輯後記

満洲公論

第3巻 昭和十九年三月号、四月号

3月号 決戦と東亜民族 安倍三郎／翼賛政治論 津久井龍雄／独逸の戦時立法と国防国家 田村龍蔵／ソ連の戦時外交 馬場秀夫／青年知識層の指導理念 山内一男／大東亜戦争と満洲国学生 石中広次／決戦下の努力増進方策 岡田一郎／決戦農村の編成替 金沢辰夫／大陸日本人と日本文化 大森志朗／満洲文化礼讃論 樺葉英治／決戦下の国民娯楽 根岸寛一／白系露人のプロフィール 守谷良平／〈隨筆〉姑と嫁 今和次郎／〈隨筆〉雨の音 佐々木かつ子／〈俳句〉霧氷 三溝沙美／中支農村の迷信 関屋牧／蒙古の自然と人 山根順太郎／〈小説〉ボタあたま 井伏鱒二／〈小説〉女の燈 牛島春子／編輯後記

4月号 大東亜建設の原動力 蠟山政道／米民主政治の正体 尾上正男／思想戦の道標 筒井清彦／電力職場の戦闘配置 押川一郎／聖戦遂行と神国建設 宇佐美淳夫／皇神の道義 斎藤毅／建州女真の精神 布村一夫／決戦下自然科学の役割 遠藤隆次／増産と本年度開拓民 山本廉／〈満洲方式〉礼讃 森田甲子三／石油を語る 佐藤健三／空軍増強に邁進する人々 伊藤金次郎／カラワン調査行 岡田文枝／〈隨筆〉寂しき落日 藤山一雄／出版断層 田中総一郎／書評 山口慎一／〈俳句〉「春北風」 金子麒麟草／大東亜理念と文学 森下辰夫／〈戯曲〉新しい娘 藤森成吉／「公論常会」原稿募集／編輯後記

満洲公論

第4巻 昭和十九年五月号、六月号

5月号 〈社論〉大東亜経済体制と満洲国特殊会社制度／

祈り 鈴木直吉／建設時評 〈公論常会〉健脚錬磨の道 紀明院恒／〈公論常会〉謝罪金を出さう 岩永敏次／〈公論常会〉日本人運動 津村英吉／〈俳句〉浴衣 葛蘭祖／アンナのひとサイゴンのまち 越田清七／〈創作〉風聞 上田広／〈創作〉雪山 北村謙次郎／編輯後記

8月号 〈社論〉建国精神のありどころ／思想の変はる戦争 富永理／思想決戦としての世界戦争 井沢弘／戦時経済と複合民族 江原又七郎／労務管理の実際と対策 西尾敏男／航空補給戦の様相 飯島正義／空襲の将来と国民防空 白川豊／乃木將軍雜記 浅野晃／生活と精神 阿部襄／満洲と南方を語る 〈出席者〉林芙美子、富沢有為男、今和次郎、佐藤観次郎、早川潔／シニへ喇嘛廟の夏祭 大間知篤三／模範農村片影 大貫大八／建設時評 〈公論常会〉開拓地と新聞 新藤篤一／〈公論常会〉毎日を防空服装で行かう 小松茂／〈公論常会〉民族と利己心 吉田一雄／公論常会原稿募集 〈興亜塔〉東京 整備の諸態 浅川哲／〈興亜塔〉南京 國積／居奇と貧官・奸商 大石淳／〈興亜塔〉上海 激しい時代の洗礼 蔵居良造／懷郷 坂井艶司／春秋戦国夜話（二） 柴田天馬／緒戦 加藤秀造／編輯後記

9月号 〈社論〉敵の企図に断乎答へむ／新中国の発展と重慶の運命 川崎万博／神皇の道 佐藤通次／時局特別刑法の精神 北村久直／宣伝と両面闘争の対敵認識 伊奈清一郎／小磯・杉山・二宮を語る 井上忠也／新内閣と国民 金井章次／支那靖定ノ大経大法（遺稿） 佐藤胆齋／胆齋先生と斯文 二上政治／十年一昔（二） 武藤富男／勤奉と社会改造 磯部秀見／開拓増産の推進力 松野伝／満洲医学の特殊性 末吉弥吉／凡婦の道 三宅豊子／〈興亜塔〉東京 切換諸景 平田重雄／〈興亜塔〉京城 半島の自負 信原一三／建設時評 〈短歌・俳句〉〇 大平得三／〈戦記〉マティン村にて 安田貞雄／〈戦記〉ニューギニアの基地 川島哲郎／童心記 三戸正孝／編輯後記

満洲公論

第6巻 昭和十九年十月号、十二月号

10月号 民族結合の基底 穂積七郎／独逸の戦力と国民秩序 辻村湖郎／〈全聯批判〉国民思想指導の根本命題 金沢覚太郎／〈全聯批判〉決戦全聯の成果と批判 松岡二十世／敵前増産と労務管理 林田茂雄／満洲建国を語る（座談会） 〈出席者〉金井章次・菊地門也・猶崎観一・高橋源一／〈戦ふ現地〉一家十四町歩の耕作 矢崎秀一／〈戦ふ現地〉祈雨祭

血涙の歌 八木橋雄次郎／〈詩〉青魂の歌 秋吉明／〈俳句〉八日よ八日よ 佐々木有風／〈俳句〉仰せ畏し 三木朱城／印度テンスキヤ爆撃行 宍倉恒孝／神苑 筒井俊一／編輯後記

満洲公論

第7巻 昭和二十年一月号、三月号

1月号 〈青年に告ぐ〉満洲国と青年 半田敏治／〈青年に告ぐ〉満系青年に寄す 莊開永／〈青年に告ぐ〉大東亜に還れ 姜学潜／〈青年に告ぐ〉開け青年の世界を 黒石寿／大東亜の将来 ホセ・ペ・ラウレル（木村毅訳）／日・米英艦隊の動向 匠瑳胤次／敵アメリカの決戦構想 原文哉／今日の飛行機と総力戦 斎藤寅郎／ビルマ戦線に羽搏く 溝口武二／酒・栄・葉 宮井一郎／魂のふるさと 大倉茂／〈興亜塔〉東京 近郊風景 今和次郎／〈興亜塔〉南京 百年河清を俟たず 大石淳／〈興亜塔〉昭南 建設一路 大島昭／〈興亜塔〉爪哇 紅白旗の勝 菊地重二／〈公論常会〉供出のあと 村山水里／〈公論常会〉壮年者に 杉本健太郎／〈公論常会〉結婚ごと 繁信夫佐戸／〈詩〉黙禱 大野沢緑郎／〈俳句〉初雪 開原冬章／洛陽より歸りて 滝川政次郎／春秋戦国夜話（五） 柴田天馬／マリベレス総攻撃 尾崎士郎／編輯後記

2月号 家国と民主政 大串兎代夫／指導とは何か 戸倉勝人／産業技術発展の特質と将来 伏見研一／大陸縦断作戦と比島決戦 森正光／敵米の戦闘機陣 斎藤寅郎／国民勤労総躍起を語る（座談会） 〈出席者〉丸山海介／河村禎治郎・吉井武繁・三浦修一・穴沢吉夫・池上林造・高橋正孝・山田清三郎／皇村建設の指標 高橋正信／十年一昔（三） 武藤富男／東京冒険 今和次郎／長靴とプラトック 岡田文枝／〈詩〉神々の生誕 井上麟二／〈俳句〉飛行雲 井口宗明／〈興亜塔〉上海 第四勢力 宮本八郎／〈興亜塔〉驚港横丁 香山九郎／〈戦記〉上陸の前後 武田麟太郎／〈戦記〉南の星 新田潤／〈創作〉民権君のこと 青木実／編輯後記

3月号 満洲国と昭和世界 花見達二／自戦郷村の建設 角田節衛／世界史上に於ける日露戦争 大場弥平／特攻精神と蘭花隊 本多修郎／満洲文化と共栄文化座談会 〈出席者〉金沢覚太郎・莊開永・竹本孫一・滝川政次郎・富永理・劉多三・山田清三郎／神風特攻隊拾遺抄 浅見淵／決戦下の酒と煙草 中村孝二郎／〈詩〉旅情 長尾辰夫／〈短歌〉嗚呼春日園生中尉 斎藤一正／花大人 工清定／山下奉文を語る 山田潤二／〈創作〉冷却塔 林田茂雄／編輯後記

本文見本

80%に縮小してあります。

國學と大東亞精神

保田與重郎

國學と大東亞精神といふことを、國學復興と大東亞精神と云ひかへると、今では多少意味が異なるのである。國學復興といふ言葉に難をうつのではない。この言葉も今日の用語として、氣樂に使つてよいと思ふ。國學がわが近世史上にも絶えてゐる。又

にたよつてゐるかを、自問自答自己追究すればよいのである。國學といふても、こゝから始める。これは本居宣長といふ人たよるのでなく、宣長を信奉するといふことは、宣長を信奉したらすぐわかるやうに、古典に入つて神代のおきてと神代のでぶりに生きるといふことである。

これを誤る者が、今日の考へで、所謂思想や政治的結論といふものを宣長からよみとらうとする。國學の眼目は、さういふ末端になく、神事を大本としたのである。神事とは神代のおきてを學ぶといふことである。

これと似たことを近頃も感じた。今日の代表的日本主義思想の大家のことについて、我々がその非を非とし、難を難として云ふ。さうすると世間では、これを思想を混亂する策略の如くに騒ぐ者がある。尤もそれらの批判を見て、たしかによりどころを失つた不安を感じる善良な人もあるだらう。しか

ある夜の拍手

横光利一

滿洲といふ土地へは初に行ったのは、今から十四年も前のことである。滿洲鐵道の起る前年で、新京をまだ長春といつてゐたころのことだ。長春とは美しい名だと思ひ、そこへ先づ行きたいと思ひだして一行五人だつた。まだ見たこともない土地へ旅をするときには、このやうに名の美しさに心おぼつて來られるのは、あながち文筆者のみとは限らぬ。人それぞれの覺えのことなれば、文學といふものの人間性と放せぬ特種な機能も早やそこに感しられ、これは迂闊にも、こせぬ深み溢へた表面の平靜さと思つた。見渡す原野の廣から、價値以上のものを價値としてしまふやうな魔力に襲はれるのは、避けがたい旅の喜びの常にもちがひなくとも、これを知るには何よりこのときの旅が便利であつた。

たしかに價値とは廣からなく、世の中はこの二つの狂ひの間に他ならぬものだといふことも、今の文學者なら誰でも氣の付いてゐることといふ、しかし、近代文學の二つの重要な要素の間にありしかと今もなほ私は思はれる。

この最初の滿洲行のとき私たちは京城から飛行機で大連に着いた。翌日、旅順を見て夕暮廣つて來ると、不意にその夜歸頭を願まれた。まだ承諾してないのに歸頭は早やいつばいに話つてゐて、斷るわけにはいかず、空想と現勢も高だしい。やむなく一行五人旅案の末、直木三十五氏と私と二人だけ食がもせず出ることになつたが、まつたく推測のない疲れのままの演壇で、私は滿洲の主題を考へ考へ詰す苦地を感じた。今はよく覚えてはゐないが、たしかに内容はこの價値と廣からとの相違に關して思ひを集中させてみた結果、ふと、唯物史觀の缺陷と推測される部分に、端なく口の觸れ進んでいつた途中、突然ただ一人の聽衆だけ激しい拍手を長くうちつづけてくれた記憶がある。それ以来十數年になるが、まだそのとき滿洲から受けた幻影の中から水飛沫の散り飛ぶやうな二つの手の打ち合ふその白さが眼から放れない。このときの兩手の白さは、今、どういふことに使はれてゐるものだらうかと、ときどき思ふのも、實は

— (32) —

— (30) —

● (上)『藝文』昭和十九年九月号掲載

横光利一「ある夜の拍手」(全集未収録作品)

● (右)『滿洲公論』昭和十九年七月号掲載

保田與重郎「國學と大東亞精神」

藝文 第Ⅱ期 全14巻

[監修] 呂元明／鈴木貞美／劉建輝

●全14巻揃定価190,050円(本体181,000円) ISBN978-4-8433-3404-1 C3393 A5判上製／クロス装／函入り

各巻の構成

第1回配本『藝文』〈満洲藝文聯盟版・満洲文藝春秋社版〉 全7巻 揃定価84,525円(本体80,500円) ISBN978-4-8433-3405-8

2010年9月刊行

- ◆第1巻◆ 康德11(昭和19・1944)年1月号〈創刊号〉／2月号〈第1巻 第2号〉 ISBN978-4-8433-3407-2
定価13,650円(本体13,000円)
- ◆第2巻◆ 康德11(昭和19・1944)年4月号〈第1巻 第4号〉／5月号〈第1巻 第5号〉 ISBN978-4-8433-3408-9
定価13,125円(本体12,500円)
- ◆第3巻◆ 康德11(昭和19・1944)年7月号〈第1巻 第6号〉／8月号〈第1巻 第7号〉 ISBN978-4-8433-3409-6
定価10,500円(本体10,000円)
- ◆第4巻◆ 康德11(昭和19・1944)年9月号〈第1巻 第8号〉／10月号〈第1巻 第9号〉 ISBN978-4-8433-3410-2
定価10,500円(本体10,000円)
- ◆第5巻◆ 康德11(昭和19・1944)年11月号〈第1巻 第10号〉／12月号〈第1巻 第11号〉 ISBN978-4-8433-3411-9
定価10,500円(本体10,000円)
- ◆第6巻◆ 康德12(昭和20・1945)年1月号〈第2巻 第1号〉／2月号〈第2巻 第2号〉 ISBN978-4-8433-3412-6
定価10,500円(本体10,000円)
- ◆第7巻◆ 康德12(昭和20・1945)年3月号〈第2巻 第3号〉～5月号〈第2巻 第5号〉 ISBN978-4-8433-3413-3
定価15,750円(本体15,000円)

第2回配本『満洲公論』〈満洲公論社版〉 全7巻 揃定価105,525円(本体100,500円) ISBN978-4-8433-3406-5

2011年刊行予定

- ◆第1巻◆ 康德10(昭和18・1943)年11月号〈第2巻 第11号〉／12月号〈第2巻 第12号〉 ISBN978-4-8433-3414-0
定価16,800円(本体16,000円)
- ◆第2巻◆ 康德11(昭和19・1944)年1月号〈第3巻 第1号〉／2月号〈第3巻 第2号〉 ISBN978-4-8433-3415-7
定価15,750円(本体15,000円)
- ◆第3巻◆ 康德11(昭和19・1944)年3月号〈第3巻 第3号〉／4月号〈第3巻 第4号〉 ISBN978-4-8433-3416-4
定価14,175円(本体13,500円)
- ◆第4巻◆ 康德11(昭和19・1944)年5月号〈第3巻 第5号〉／6月号〈第3巻 第6号〉 ISBN978-4-8433-3417-1
定価13,650円(本体13,000円)
- ◆第5巻◆ 康德11(昭和19・1944)年7月号〈第3巻 第7号〉～9月号〈第3巻 第9号〉 ISBN978-4-8433-3418-8
定価17,850円(本体17,000円)
- ◆第6巻◆ 康德11(昭和19・1944)年10月号〈第3巻 第10号〉～12月号〈第3巻 第12号〉 ISBN978-4-8433-3419-5
定価13,650円(本体13,000円)
- ◆第7巻◆ 康德12(昭和20・1945)年1月号〈第4巻 第1号〉～3月号〈第4巻 第3号〉 ISBN978-4-8433-3420-1
定価13,650円(本体13,000円)



〒101-0047
東京都千代田区内神田2-7-6
TEL.03(5296)0491
FAX.03(5296)0493
<http://www.yumani.co.jp/>
e-mail eigyou@yumani.co.jp

藝文

第Ⅰ期『藝文』〈藝文社版〉 全22巻

好評発売中

●揃定価：本体272,000円＋税 ISBN978-4-8433-2910-8

ゆまに書房 TEL.03(5296)0491／Fax.03(5296)0493 年 月 日		※毎度ありがとうございます。お申し込みはぜひ当店へ。	
ご注文書	藝文 第Ⅱ期・全14巻		取扱店
	☐ 第1回配本(全7巻) ☐ 第2回配本(全7巻)		
	セット		
お名前			
ご住所			
	TEL	()	
			10.05/01.7000.H